

早船ちよ著*長編小説

ちさ・女の歴史

第4部=冷たい夏
理論社刊





0393-91104-8924

© Chiyo Hayafune Printed in Japan

1979年初版

ちさり女の歴史 第四部 冷たい夏

一九七九年十二月 第二刷

著者／早船ちよ

制作／小宮山量平

発行者／山村光司

発行所／株式会社理論社

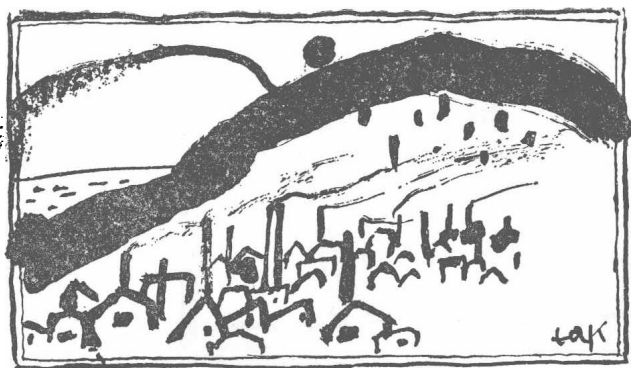
東京都新宿区若松町一〇四

電話(03)二〇三—五七九一

郵便番号 一六二

振替 東京九—九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えます。



ちさ・女の歴史Ⅱ第四部

* はじめに *

教育労働組合は

われわれの 城砦であり

『新興教育』は

われわれの 武器である。

——一九三〇・八・一九 新興教育研究所創

その統一主体として

われわれ教師が存在する。

はじめに

冷たい夏／もくじ

はじめに／1

第一章

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
ままよ、この身を爆弾に	教育労働者	ピオニール・3月のコヨミ	うちさ行きたい山こえて	きのうを考えるな	こここそ、じぶんの場	よいとまけ！ クレーン	雪の日の客	流刑囚たち	揺れる	一九三〇年という年	米と、麦と、みそ

203	185	158	149	132	119	101	78	62	45	17	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---



第二章

17 16 15 14 13

季節によみがえる血
期して待つべし
尾頭付きの赤飯
血塗られた天長節
アー、花のみやこへ近よりだ

そうてい・カット 鈴木たくま

283 262 249 241 223



* 綱集部より

さきに作者は『峠』『湖』『街』の三部作を、発表した。

(いづれも一九六六年)

当時ひと息いれた上で、この長編をさらに書きつぐ予定であったが、ここに十三年の歳月を経て、『冷たい夏』『炎群の秋』『熱い冬』が一気に書きあげられ、全六部の連作が完成した。この機会に、連作の総括題名を『ちさ・女の歴史』としておくことにした。

第一章

* * *

1 米と、麦と、みそ

一九三二年正月三日。

かわいた雪が、鉛いろの空から、あとあと舞いおちてくる。ひっそりと人気がない製糸工場街を、とつぜんのように号外の鈴の音が、じゃらんじゃらん、駈けぬける。

——号外、号外！ 皇軍ついに錦州に無血入城！

——号外、号外！ 新春に贈る大戦果だよ、一枚二銭、二銭！

テラー多々羅馬吉は、店からとびだしていき、すばやく号外を一枚かすめとる。

「二銭よこせ？ けちなこと、いうでねえだ。チャンコロを負かしたというのに」

馬吉は、どんと号外売りの背を押しやった。そして、号外を片手に、ひらひら、ひけらかしながら、和服裁縫所のガラス戸をがらりあけて入ってきた。

「やあやあ！ ちさちやとみつ子さ。杉太郎に、おじさまも、おばさまも……。一家おそろいだね、戦勝の春だで、なにしろ、めでたいことだ」

母のはるは、あいそうよく入口まで立っていつて迎え、改まって頭を下げる。

「おめでとうございます。旧年ちゅうは、いろいろとお世話になりました……」

それは、辞儀だけではなかった。木賃宿に巣くっていた他国ものとして貸家をことわられた

とき、馬吉の尽力がなかったらこの家に住みつくこともできないはずだった。

父の衆之助も、こたつから出てきて手をついた。

「何ともはや、去年はえらいお世話になりました……とにかく正月を迎えさしてもらいましたわいな」

多多羅馬吉は、へんじをしなかった。片手を懐へつつこんだまま、ぬうつと棒立ちになり、無遠慮な目ざしで、じろじろと家のなかを睨めまわす。家財ひとつない六畳一間のすみに、りんご箱代用の食器棚があるだけだ。

衆之助とはる。長女の十八歳のちさと、妹の十六歳のみつ子、その下が下諏訪小学校に転校、高等科二年になる弟の杉太郎で、一家五人は正月だというのに、着たきり雀である。

いかにも夜逃げしてきた一家の佗しいうらぶれた春である。

一家そろって、けさはもう雑煮の餅もないところから、残り米に野菜を切りこんで雑炊をこしらえてたべ、お茶をのんでいたところである。――あすといわず、もうきょうの昼めしの算段をしなければ……。なんとかして、米と麦と、できたら味噌を手にいれねば。あてはないけれど街へでかけてみよう。言わず語らず、そんな話題をだれかが切りだそうとしていた矢先きである。

「いや、さ。わしは、おばさまん家へ、でっけえお年玉をあげずと思ってきたがね」

「えっ？ それは何」

ぱっと顔を向けたのは、みつ子だった。

「おめの口だよ、みつ子さ」

「あれつ、糸とり女工の？」

「おう。松がとれて一月八日になったら、片貝組製糸下諏訪工場へ入場するだぞ」

馬吉のことばがおわるか、おわらないにみつ子は、「わっ！ うれし」と、こたつからとびだして手をたたく。

「わっはっは、はは！ みつ子さよ。これで、いよいよ、待望の二十梓^{むくど}繰りの糸とり様になれる……めでたいこんだね」

馬吉は、のこのこ上がってきて、こたつへ入りこんで、ちさの方へ向く。

「のう、ちさちゃ。おめさまにも、天下のファミリイ・コンツェルン片貝組製糸に、しごとを見つけてやったよ」

「あれ、ま。ほんとうですかいな」

はるは、えへへと笑って、ちさをかえりみる。ちさは、頬に血がのぼるのを覚えた。
はるは、

——ひとを、おひやらかすなんて罪ですよ。だまされませんでな……。

と、本気にしない顔をしてみせる。

「信用せんのかね、あはははは」

三白眼^{さんばく}を見すえて馬吉の頬は、ちっとも笑っていない。むしろ獲物をねらうタカのような残忍ともいえる冷酷な立てじわが刻まれているのを、ちさは見た。

「舎監先生だよ、しごとというのは」

「へえ、そんなえらいしごとが、娘なんかにやれますかいな」

「いやいや、当分は見習いということだ。有名人に嫁にのぞまれている娘だ。糸とり女工なんかみつともなくて、させられねえだ……」

——長谷部飛行士をいつているのだった。

はるは、それに気づかないふりをする。

ちさは、馬吉をまっすぐに見ていった。

「わたし、みつ子といっしょに二十棒の繰糸を習いたい——そうおねがいしたんです」
「……くふうーん」

馬吉の大きな鼻孔がふくらんだ。最大限氣にくわない沈黙で、じろりと睨みかえす。

「おねがいです。糸とり女工になりたい、——そう思うようになりました」

ちさは、ひるまなかつた。妹のみつ子に、約束した決心は、いまでも、かわっていないのだ。
「ことわるよ」

馬吉は、押しつけるような低い声でいう。

「気の毒だが、ちさちやや。おら、おめさまを、糸とり女工になんか世話する気はねえだ」
「……」

ちさは、二の句がつげなかった。

「糸とり女工になっていなんて心掛けだと、舎監見習いの口も、せっかく工場長に談じこんで、うんといわせたけど、これもことわるほかねえずら」

はるは、びっくりして、すがりつかんばかりにした。

「多多羅さん。そんなこといいんさるんで、どうか……」

糸之助は逆上して、ちさにどなりつける。

「こら、ちさ。お身はどうして、お頼申さんのじゃ。せつかく、いい話をもってきてくれらしたに、お身の横着なへんじは何じゃ」

そして、畳に匍いつくばって、馬吉に頭をさげるのだった。

「なんとも、へい、世間知らずの娘でして……へへへ。わるう思わんでくれんさい」

「そういうこんだ、おじさまや。日本一の製糸資本、大片貝組製糸に、まて、いにつとめさえすれば、将来は間違いなし。いい月給がもらえるだぞ」

「そうですって。そうなりや、こりや、ねがってもない幸せです」

糸之助の声は、上ずってかすれ、泣き笑いのように顔が歪んでいる。

ちさは、唇を噛んだ。——ものごとは、どうして、ちぐはぐに運んでいくのだろう。岡谷の職業紹介所へしごと探しにいったときに、こんな話があったら……。

——いやいや。わたしは、しごとをえらぶなんてぜいたくは許されないのだ。

「大片貝組の、千人の寄宿女工の頭にたつて取りしまりする舎監さまだ。有名人の嫁になつても恥ずかしくねえ。のう、おじさまや」

馬吉は、しだいに機嫌を直して、いつもの人をおひやかす調子になる。

「いまに、杉戸家には、金が入ってへえって、馬にくわせるほどになるずらよ」

ちさは、思いまどって、うろうろしている。馬吉は、

「倉が建つぞ、倉が！ その節にや、おれ、頭をさげて借金にいくだからね」

小気味よさそうな哄笑をあげせかけて、ふらりと立って戸口から表へでていく。

風がきた。馬吉の破れ羽織が、ひらりとめくれた。彼は、いつてしまった。
はるは、やさしい微笑を二人の娘に向ける。

「よかったな、みつ子。ちさ」

みつ子は、にこっと片笑くぼをへっこまして、こっくりする。

「それにしても、ちさ。お身は、ろくに頼みもしなければ、あいさつもしなんだぞ、なあ」
衆之助は、こたつへ入ってきて、冷えた茶を、がぶりと飲む。

「そや、そや。改めて多多羅さんの家へかけて、おれいかたがた、しっかり頼んでこにや」

「そうよ、そうよ。それだけは、きちんとせにやな。……ようし。ちさ、いっしょにこい」

はるは、一張羅じやうらの外出着にきかえるのだった。そして、多多羅馬吉へ改めてあいさつに行く
その手土産を買う金を、信濃屋のおきのへ借りにいこうという。——そういうことで、一円か、
うまくいけば二円借りる。多多羅馬吉へは、三十銭か五十銭のせんべいを手土産に持っていけ
ばいい。

——残った七十銭か一円五十銭で、米と麦と、みそを買って食いつなぐのだ。

言わず、語らず、そんな心づもりをするはるの気持が、びんびんと、ちさへつたわってくる。

「なあに、お身さえ、いい職につければ、一円や二円の借金が何じゃ」

いそいそと、小きさみな歩調を早めるはるに、ちさは追いつきながら、

「かかさま、かかさまえな」

「ほい、何じやい」

「ほんとうは、おら。糸とり女工のほうがえい、糸とり女工になりたい」

はるは、足どりをゆるくした。

「どうしてや。どしてそんなことをいう」

「去年の暮に、みつ子が風邪をひいて工場をやすんで帰ってきたらう？」

「ああ、あのとき。だいぶ辛^{つら}そうにしとったが……」

はるは、すぐに思いだした。しかし、みつ子がもう三並木工場へは帰らない決心で家へもどってきたのを、いまだに知らないでいる。

あの夜、ちさはみつ子といっしょに寝た。

「ねえちゃん、ねえちゃんは女工になってもえいと、本気で考えるようになったの？」

耳たぶに、みつ子の熱い息がふれた。

「そうやさ。糸とり女工になりたい。なれなんたら、ほかのしごとでもしかたがないけど、繰^{くり}糸女工になったほうが幸せなんじゃ」

いいながら、ちさは自分のかわりように自分でもおどろいていた。

みつ子は、むしゃぶりつくように抱きついて、しっかりと手を握った。

「うれしい。ふたりいっしょに二十枠を習おう。きつとな、きつとな。やくそくよ」

あれから、まだ半月とたっていないのだ。

「あのな、かかさま。女工になんかなりとうないと考えておったのが、考えちがいじゃと思うようになったのよ」

「ばかが！ 十八にもなって養成っ子なんかどこ使ってくれる」

「ほんとうよ、いまほど強く、糸とり女工になりたいと思ったことはないぜな」

年の暮にちさは、塩谷一夫の下宿を訪ねた。

塩谷一夫は弟の杉太郎の受持の教師で、図書館の読書会でも同席したことがあった。彼は、ちさの話を黙ってきいていた。しばらくして、考え、考えいった。

——……そうね。何とか、小学校教員の口を見つけてみますよ。時間がかかるかもしれないが、——いいえ、教員のしごとでなく、いますぐ、どこか製糸工場へ話してもらえないかと思ってきたのです。二十杵の多条練糸機の見習いに妹のみつ子といっしよに働きたいのです。

小学校では、ちさのふるさとの飛驒の高山でもそうだが、女工組合（または女工供給組合）を、町役場などとも結託してつくっている。女工のあつせん紹介をしたり、女工たちの利益代表（組合をつくることのできた大正期には）でもあったりする。ちさは、そのことを言っているのだが、塩谷には通じないようだった。

——そうだな、山梨県の韭崎^{ひづり}ちかくの村まで行く気なら、ぼくの郷里へ聞いてもいい。……そうだ。上田市の奥村弘行にたのめば、小県^{ちいさぐん}郡の村の分教場に口が見つかるかもしれない。

——いいえ、先生のしごとでなくても……。

——いま、教師のしごとは、大事な時期にさしかかっていますよ。あなたのような人こそ、なれる機会があれば教師になったほうがいいんです。

塩谷は、押し返してそういった。

ちさは、ちよつと考えて、どうぞよろしく……といった。しかし、製糸女工になりたい考えは、変わらなかった……。

はるは立ち止まり、こわばった顔を向けた。

「どうしてや? どうして、いまごろになって」

「労働者になる決心をしたのよ」

「主義者みたいなこと、いうな」

「そういうわけじゃないさ」

「出世できて、体にくができて、月給もたんともらえる。……これもお身ががんばって勉強して先生の免状をとったおかげじゃ。……長谷部さんの嫁の話なんか気にするな」
「……………」

ちさは、とぼとぼと、母にひかれるようにして歩いていく。だいじなものが、するりと、じぶんの手からすりぬけて落ちるのを感じる。

——「先生」とよばれ、きちんとした着物に袴はかまをはいて学校をつとめることを、でなかったら事務職につくのを、ほんの一月まえまでは、あんなにものぞんでいたのではないか。みつ子に、はげましの手紙をだすまでは。そして、糸とり女工の非人間的な苛酷な長時間労働へ入っていくのを嫌っていたのに。

*
*
*

木賃宿「信濃屋」の女将おかみきのは、金を二円貸してくれたほかに、切餅をいくきれか新聞紙につつんで、はるにさしだした。

「すみません、女将さん。新春そうそう」

「何だっておめさん、水くさい、えんりよなんかいらんことよ。ちさちゃんに、出世できる口が

かかったんだもの。わしだって、こんなうれしいことはねえじゃあ」

はるは、米と麦とみそを、少しずつ買い、多羅馬吉へあいさつにいくためのせんべいも、よけいにはずんだ。はるは、どんなに逼迫しているときでも、おくりものにけち臭くする根性こんじやうをさげすんだ。

——なあと、働きさいすれば、このくらいの金は、すぐ稼いでみせるに。

はるは、もう一袋のせんべい包みをつくってもらった。それは、桑之助に、土方しごとを世話してくれる親方へのお年賀である。

かえりみち。

「ちさ、父つあまにしごとがあれば、旧正月にはあらためて餅をつかまいか」

はるは、晴ればれと笑う。ちさの手には、重たい風呂敷包みのなかに、信濃屋の縫い返しぬいがへしの賃しごとが入っていた。「なに、洗濯してないって。ようござんす。わしらあ、どうせ手があるといとるで、ほどこいて洗って張って、しゃんと縫い返してあげますに」と、はるが、むりやりのように押入れから持ちだしてきた衣類である。はるは、そのほどこきものは、桑之助にも手つだわせるつもりである。ちさやみつ子には、洗い張りも縫いかえしも手つだわせる。正月だからといって手をあかせて遊ぶのはもったいない。

ちさは、舌をまく思いで母の五十歳をこえた生活力の逞しさに目をみはる。けさは、昼めしのあてがなかったのに、いまは生きぬいていける生計のめどがたったのである。

「これで、ちさとみつ子が、片貝組へ入れたらなあ、ことしは、えい年にしてみせるぞう」
「そやな、そやな。働かにゃ」